

芦津実全と万国宗教会議

藤田和敏

はじめに

明治二六年（一八九三）、コロンブスのアメリカ到着四〇〇年を記念したコロンビア万国博覧会がシカゴで開催された。一九世紀後半の工業化で発展したアメリカ文明を誇示するために行われたこの博覧会では、女性の進歩や節酒運動などをテーマとした二〇分野の世界会議も併設され、民主主義の原理とキリスト教というアメリカの理念を示すことが試みられた。^① それらの世界会議のうちで注目されたのが万国宗教会議である。会議の準備にあたりシカゴ第一長老教会のバロースを議長とする委員会が組織され、全世界の宗教代表者に会議への参加を求める挨拶状が送付された。日本からは一〇名の宗教家が招待されており、仏教界からは芦津実全（天台宗）・土宜法龍（真言宗）・釈宗演（臨済宗）・八淵蟠龍（真宗）と通訳の野口善四郎が渡米したのである。^②

世界規模での宗教間対話の先駆けと評価されている万国宗教会議^③は、キリスト教の価値観によって諸宗教を統合しようとする主催者側の意図に対して、日本からの参加者が自らの立場をどのように説明したかという観点から、主に宗教学の分野で研究が蓄積されてきた。会議の内容を包括的に分析したジェームス・ケテラーは、①ダーウィン進化論の枠組みが博覧会の展示全体に反映されており、白人社会の「文明」を頂点とするヒエラルヒーに編成された「非文明」世界の信

仰・文化・民族は、進化によって破壊され、統合されていくことが不可避免であると位置づけられていたこと、②会議の実現には、「未開文化」においても永遠で絶対的な宗教的本質が見出せるとしたマックス・ミュラーの宗教学が大きな役割を果たしたが、その宗教比較論はキリスト教を最上とする抑圧的なヒエラルヒーに加担するものであったこと、③招待された各国の宗教家は自分たちの宗教解釈を持ち寄ったが、それらはキリスト教の利害に基づいて再解釈されてしまったこと、④ヨーロッパ言語の能力がない日本の仏教徒は会議での議論を理解できず、その講演は風変わりな擬似宗教的な仏教のイメージを助長するものになったことなどを指摘した。^④

ケテラーの研究以降は日本人宗教者の講演内容について個別の分析が深められた。釈の講演「仏教の要旨并に因果法」を考察した那須理香は、仏教の知識がない聴衆の理解を優先させた釈が、英訳文を日本語原文から大きく改変させ、「因果法」を原因と結果の法則によって成り立つ進化論に類する教理に特化させて説明したことを指摘した。また、在家仏教徒で神智学の代表として参加した平井金三の講演「キリスト教に対する日本の真の立場」を検討した高瀬航平は、高い英語能力を持つ平井が、不平等条約の改正という政治課題と宗教を結びつけ、大乘仏教を含めた全ての宗教に究極的な真理が存在するにも拘わらず、キリスト教徒である条約国が日本を不当に抑圧していると主張

したことを論じた。^⑤

那須と高瀬は、ケテラーが示した価値観が支配する万国宗教会議の場において、平井・釈がどのような手法で自己の宗教的立場を明示したのかという講演の技術的な側面に着目して分析しており、会議に参加した日本人宗教者が抱いていた思想の全体像と講演内容を関連させて論じていない。釈を含めた僧侶四名の講演は、ケテラーに「自分たちの宗教意識を主張することもそれをうまく表現することもできなかった」と評価されたものではあったが^⑥、そこには過去の活動によって培われた彼らの思想が反映されていたはずである。

以上の問題意識に基づき、本稿では天台宗の芦津が行った講演「仏陀」について、天台宗僧侶としての彼の行動や思想と関連させて考察するとともに、講演後の活動に与えた影響を検討したい。なお、筆者は明治二〇年代までの天台宗の教団組織と芦津の事跡に関して次のことを論じているので、分析の前提として提示しておく。前者については、明治一〇年代から同二〇年代にかけて相次いで教団規則の制定が行われたが、神仏分離令によって打撃を受けた地方寺院の実情は教団の方針に対応できるものではなく、財源が大きく不足するとともに教育布教活動が低迷し、内部紛争が続いたこと、後者については、芦津の著書『真正哲学殺活自在論』・『日本宗教未来記』から、①臨済宗相国寺派初代管長荻野独園に参禅した経験を踏まえて、三観を一心に融合することを求める天台止観よりも洞山五位頌によって段階的な観心のあり方を説いた臨済禅を優位に見る修行の方法論を打ち出し、停滞する天台宗の活性化を試みたこと、②天台宗務庁（以下宗務庁とする）職員として教団の布教活動を主導した経験を踏まえ、布教方法の改良や和訳経典の出版など教団仏教を改革する提言をまとめたことなどを明らかにした。^⑦

一 『仏教各宗綱要』編纂と万国宗教会議への参加

1 『仏教各宗綱要』編纂と布教活動

明治二三年（一八九〇）、著書の執筆などを精力的に進めていた芦津のもとに仏教界全体が取り組む事業への参画要請がもたらされた。それは、仏教各宗協会による『仏教各宗綱要』編纂事業である。仏教各宗協会は、明治二三年六月に各宗派管長及び執事を構成員として結成された。同年には第一回帝国議会が開催されており、僧侶に対する衆議院議員の被選挙権が認められなかったことなどへの危機意識から、各宗派が連繋して課題に取り組む体制が構築されたのである。^⑧

六月一二日に東京築地本願寺で開催された各宗管長会議で次のような『仏教各宗綱要』編纂案がまとめられた。すなわち、①日本源流の一三宗の歴史と教理を「世間普通の文字を以て成るべく平易明晰に叙述」すること、②各宗派の叙述は「繁簡詳略を均くし毫も偏頗褒貶を容」れないこと、③東京に設置した編輯局に主裁・編者・書記を置くこと、④主裁と編者が作成した凡例に基づいて各宗派は原稿を執筆すること、⑤編輯局は原稿を修正して執筆者に校閲訂正させることなどである。^⑨『仏教各宗綱要』編纂事業は、独自の蓄積を持つ各宗派の歴史と教理を統一された様式で社会一般に説明することが意図されたものであり、編輯局の主裁と編者には様々な教理上の概念を的確に把握する高い力量が求められた。主裁・編者は各宗管長会議において投票で選出することになり、島地黙雷が七票、芦津が一四票、土宜が一二票、釈が六票を集めて当選した。主裁には島地が任じられることになったが、これは明治維新期の大教院分離運動で仏教界を代表する役割を果たしたことが評価されたからだと思われる。^⑩

七月三十一日に、『仏教各宗綱要』天台宗部分についての編纂委員に

芦津が、校正員に奥田貫昭・桜木谷慈薫が任じられた。^⑪芦津は担当部分を短期間で執筆しており、九月にはその原稿が天台宗の出版物『天台宗綱要』として宗務庁文書課より発行された。^⑫芦津は一月に東上して編輯局に入ったが、一二月の段階で華嚴・天台・浄土・日蓮・真宗・時宗などの原稿が入稿されていた。^⑬明治二四年五月には「法相、天台、浄土、時宗、融通念仏、日蓮、曹洞、黄檗宗等の分も第一次修正粗は整頓し、自余の宗派も原稿修正に着手中」という状況になり、七月一日に第一次修正を脱稿した芦津は宗務庁に帰っている。^⑭

宗外での活動を活発化させた芦津であったが、宗内においては精力的な布教の取り組みにも拘わらず、教勢停滞を改善させることはできなかった。拙稿で指摘したとおり、明治二年に制定された『天台宗宗則』で教育・布教活動の充実を目指す路線が既に示されていたが、府県ごとに置かれる予定であった副教長の選任が難航するなど、その施策に進捗が見られなかったのである。^⑮布教活動の立て直しを目指した宗務庁は、明治二三年二月一〇日に「各風土人情を斟酌し其宜に従ひ以て伝道の方角を定むる」布教条令を制定するための意見書の提出を全国九大教区の総教長・教長に通達し、^⑯同二五年四月一二日に全一七カ条の「布教法細則」を定めた。しかし、その内容は、第二条「布教ハ一心三観ノ妙旨ニ基キ円頓直捷ノ法門ヲ説テ、広ク観法、坐禅、念仏、唱題等其機類ニ応シテ挙示シ、要スルニ本具ノ仏知見ニ開示悟入セシムルヲ所期トスベシ」のように教義上の一般論に終始しており、総教長・教長の積極的な意見が得られたとは思えないものであった。^⑰「布教法細則」に基づき派遣されることになった布教師も芦津と北村忍道の二名のみであり、四月一五日に芦津は埼玉・群馬・栃木・福島四県、北村は福井・石川・富山三県への布教を命じられたが、^⑱その範囲が限られており、全国的な布教の活性化に結びつくものではな

かった。

2 万国宗教会議への参加

明治二五年（一八九二）七月九日に四県の布教を終えた芦津は宗務庁に帰ったが、その二週間後の二二日に万国宗教会議委員会議長バローズが芦津に宛てた六月一五日付の文書三通を受け取った。すなわち、①バローズ書簡、②万国宗教会議商議會議員任命状、③万国宗教会議に関わるバローズ編集の「第壹報告」である。③の「第壹報告」は、イギリスの首相グラッドストーンなど万国宗教会議の趣旨に賛同する各国の著名人・宗教家八三名が委員会に寄せた書簡を紹介するとともに、会議において各宗教の真理が示されるべきことを謳った会議目的一〇カ条と、他宗教に対する酷評の禁止などを定めた條款六カ条が掲載されたものであり、①の書簡において「第壹報告」に対する意見の提出を芦津に求めている。^⑲八月七日に芦津はバローズに宛て返信を出し、後日に意見を送ること、会議への出席を希望することを伝えた。^⑳

バローズは、「第壹報告」で諸宗教が平等に扱われることを論じたが、その趣旨に矛盾する文書が天台座主三浦実源のもとに届けられた。それは、三浦への万国宗教会議評議員推薦状とともに送られた、バローズが七月一〇日にニューヨークで行った演説「世界博覧会に於ける宗教の効力」の筆記文であった。同文書は芦津にも送られたが、文中に「仏者の須臾も賛同する能はざる事項」があり、芦津は「或は他人即ち基督教者に送らるべき者」を間違えて発送したと推察されるが、故意に送付したものならば会議への出席を断る旨の書簡を一二月四日にバローズへ差し出している。バローズは明治二六年一月七日に返書を認めており、書記の錯誤により送られたものであると謝罪し

た。²¹ バローズの演説筆記文については森孝一が分析しており、「万国宗教会議を世界を福音化するための国際的なリヴィヴァルの機会にしたい」とする論旨であったこと、それは万国宗教会議に反対するキリスト教界の勢力を懐柔するための方便と解釈できるが、バローズ自身は会議中もキリスト教による世界宗教の統一という信念を一貫して抱いていたことを指摘している。²² このような主催者側の態度は他の文書にも表れており、日本の仏教界では会議への参加に反対する意見がかなり出ていた。²³

芦津は、万国宗教会議への参加を決意し、二月八日に「渡米主意書」と「万国宗教大会参列陳情書」を公表した。²⁴ 後者の文書において芦津は、大乘仏教を西洋に広めるといふ自らの抱負を述べたうえで、「前途難関の遮る初門」として「渡航滞錫費」の支給がないことを挙げ、「三宝篤信の士女」からの喜捨を求めた。これは、前年の七月に開催された仏教各宗協会の定期大会で万国宗教会議に代表を送ることが否決されたために、参加者はそれぞれの責任において費用を工面する必要があるからである。²⁵

芦津の渡航費を確保するために、滋賀県大津町大字榎屋に芦津師渡米準備事務所が置かれ、有志による義捐金の募集が開始された。²⁶ 八月一日には東京芝の青松寺で渡米する芦津・土宜・釈・八淵・野口のために一三〇名余が参加した送別会が催され、四日に五名を乗せた英国船エムブレズ・オブ・ジャパン号が横浜港を解纜してバンクーバーに向かった。²⁷ 芦津は土宜とともに万国宗教大会後に欧州へ渡って諸国の宗教状況を視察し、さらにインドに赴いて仏跡参拝を行う意向を示しており、多額の費用が必要であることから渡米後も義捐金募集は続けられた。²⁸ 最終的な義捐件数は九五五件、金額は二三七六円二〇銭八厘・三七ドル二五セントに達しており、日本仏教を紹介するための仏

具衣体図・日光山仏殿閣大型写真や気付け薬である宝丹など現物も寄せられた。

芦津ら一行は、八月一六日にバンクーバー、二二日にシカゴへ到着し、万国宗教会議の開催を待つことになった。²⁹

3 講演「仏陀」

万国宗教会議は、明治二六年（一八九三）九月一日に三千人が収容できる新技術館内コンブス・ホールで開幕した。会期は一七日間であり、三日目に野口が「究極的宗教」、平井が「キリスト教に対する日本の真の立場」、四日目に土宜が「日本における仏教とその宗派の歴史」（平井代読）、六日目に八淵が「仏教」（野口代読）、八日目に釈が「仏教の要旨并に因果法」（バローズ代読）、十一日目に芦津が「仏陀」（同）を論じた。³⁰

芦津の講演「仏陀」の英文記録は、釈のものとは比べると三倍以上の分量に及ぶ長大なものであった。³¹ 内容的には、①三身説、②四種の涅槃、③仏の智恵と慈悲と勇氣、④三蔵、⑤五時八教、⑥印度仏跡興復会の六つに分けることが可能である。以下、順を追って検討していく。

①では、成仏した後の人格を法身、修養の結果として得られる人格を報身、教化のために自ずから表れる人格を応身と、三身の基本的な定義を論じたうえで、これらの属性は仏の専有ではないが、凡夫の我々は煩惱の塵にまみれているので仏の境地に達することができないこと、仏は最高の精神状態、すなわち涅槃の境地にあることを示した。続いて②の解説に入り、涅槃は本来自性清浄涅槃↓有余涅槃↓無余涅槃↓無住処涅槃の四段階に分かれており、本来自性清浄涅槃と無住処涅槃を大乘の涅槃、有余涅槃・無余涅槃を「小乘」（上座部仏教）

の涅槃と説明した。

四種の涅槃については佐藤俊哉が検討しており、I 本来自性清浄涅槃は客塵煩惱によって覆われているものの本来の性質が清浄である真如を指していること、II 有余涅槃と無余涅槃は煩惱障を断じ尽くした結果として現れる真如であり、生存の根源である身体が残存しているか、身体までも断じているかで有余涅槃と無余涅槃に分かれること、III 無住処涅槃は般若によって生死の領域にも、大悲によって涅槃の領域にも安住することがない涅槃であり、生死・涅槃の両極端にならず、両者の境界線上を歩む姿を表現していることが論じられている^⑤。芦津も佐藤の解釈のように涅槃を捉えており、身体までも断じる無余涅槃を理想とするのが「小乗」の涅槃、涅槃をも相対化した最高の境地に達しているのが大乘の涅槃と、「小乗仏教」よりも大乘仏教が優れていることを主張したのである。

林淳が論じているように、一九世紀後半におけるヨーロッパの仏教学者は、オリエンタリズムの影響からブッダを理想的な人間として描くとともに、植民地支配によってヨーロッパの図書館にもたらされた「小乗仏教」の典拠であるパーリ經典こそが真のブッダの言葉を伝えるものと捉えていて、大乘仏教を説く漢訳經典を寄生虫のように嫌っていた^⑥。万国宗教会議での仏教理解も大乘仏教を蔑視する考え方で占められたのであり、芦津ら日本仏教界の参加者は大乘仏教の価値を強調しなければならなかったのである。芦津は、『真正哲学殺活自在論』でも「小乗仏教」を灰身滅智（無余涅槃の状態）の思想として排撃したが、四種の涅槃の解説はその延長線上のものであった。

③において、智慧によって人々は苦しみから解放されること、慈悲は全ての存在を差別なく各々の条件に応じて救済するものであること、智慧と慈悲が備わっていても勇気がなければ人を救えないことが

論じられており、④で経・律・論によって成り立つ三蔵が説かれている。三蔵については、仏滅から数百年を経てチベット・モンゴルなど北方諸国、中国・韓国・日本など東方諸国、セイロン（スリランカ）・シヤム（タイ）などの南アジア諸国の三カ所に伝播し、前二者が大乘、後一者が「小乗」に分離したと指摘するとともに、大乘仏教こそが仏教の主要な部分を構成していると述べている。

⑤では、天台智顗が唱えた教相判釈である華嚴・鹿苑・方等・般若・法華涅槃の五時と化法四教・化儀四教を合わせた八教が説明された。芦津は釈迦の生涯における説法の各段階に諸經典を配当して法華經を最上とする教理の体系を示した五時の鹿苑時において、「小乗」の經典である阿含經が説かれたと明言することで、自らが最上の教理と位置づける天台教学によって「小乗仏教」は包摂されているという見解を聴衆に説こうとしたのである。⑥の印度仏跡興復会は、セイロンの仏教復興運動家ダルマパーラが展開したブッタガヤ復興運動に呼応して明治二四年に日本で結成された組織であるが、その解説は全体の論旨から外れたものになっている。

芦津の講演「仏陀」は、三身説・涅槃・三蔵など仏教の基本概念を説明したうえで、「小乗仏教」に対する大乘仏教の優位を証明することに力点が置かれたものと評価できるが、⑤の五時八教のように芦津がこれまで蓄積してきた思想も色濃く反映されていた。②の解説の後には、自由で活発に働く心こそが真如であるという禅思想の根幹が説かれているが、その説明には、「The mind is absolutely so grand and marvelous that even the heaven can never be compared to its highness, while the earth is too short for measuring its thickness. (心は、とても壮大で素晴らしいもので、天でさえその高さを比べることができず、地はその厚さを測るには短すぎる)」と、栄西の著述である『興

禪護國論」の序文「大哉心乎、天之高不可極也、而心出乎天之上、地之厚不可測也、而心出乎地之下」³⁵⁾の英訳が引用されており、禪の教理を端的に紹介しようとする芦津の意志がうかがえる。

しかし、ケテラーが指摘しているように、講演内容を仏教への関心が薄い聴衆が理解できたかといえ、それは疑問である。³⁶⁾「因果法」を進化論に関連づけて簡潔に論じた釈の講演に比べれば複雑な概念を詰め込みすぎであり、自らが主張したいことを一方的に論じた講演と評せざるを得ない。芦津は、大乘仏教への知識がない欧米人について「They have entirely misunderstood. (完全に誤解している)」と嘆いたが、その意図は聴衆に届かなかったのではないだろうか。

以上、『仏教各宗綱要』の編集に携わるなど、当時の仏教界を代表する学僧として認知されていた芦津が、万国宗教会議において「小乗仏教」に対する大乘仏教の優越を論じ、さらに自らが培ってきた天台教学・禅思想を披瀝したことを明らかにした。この経験が帰国後の芦津の思想や行動に与えた影響について次章で考えてみたい。

二 帰国後における芦津の思想と行動

1 日本国内における講演内容の紹介

万国宗教会議における全ての日程を終えた芦津は、明治二十六年（一八九三）一〇月三日にシカゴを発し、十一月二日に宗務庁へ帰った。ヨーロッパ・インド訪問は「共同会議の模様を速かに報道して将来日本仏教の爲めに大に計画することあらんとする精神」によって延期されたのである。一二日に坂本讃仏堂において「万国宗教大会議の実況」との論題で帰朝報告演説会を開催しており、千有余名の傍聴者を集めた。演説会後もアメリカの様子を聞こうと自坊を訪ねてくる人々

に逐一対応し、持ち帰った写真などを紹介したところ、「殆ど応接に暇あらざる繁忙なりき」という状況になった。³⁷⁾

芦津は、帰国早々に「万国宗教大会批評」を教団機関誌『四明余霞』に寄稿しており、彼が万国宗教会議に対して抱いた認識を知ることができる。まず、会議全体について、「世界宗教史上に一大段落を造りたる」意義深いものであり、「平和の内に歩み、毫も腕力的暴行を受くることなくして魔事なく会合を了れり」と、各国の宗教者が平等な立場で講演を行うことができた論じた。会議前における主催者側の対応もあり、芦津はキリスト教中心の運営が行われるのではないかと強い不信感を抱いていたが、それが杞憂であったと評価したのである。また、「大会多数の議員が（中略）仏教の円満純全にして宏大なること比類なきを認め、彼等は仏教と云ふ一大旗幟の下に雲集しはじめたる也」と、日本人仏教者の講演によって聴衆は大乘仏教の意義を完全に理解したこと、「今回の大会に於て特に見るべきは、基督教が甚しく擯斥を受けたと同時に、同胞の情を欠ける信仰の著しく排斥せられたることは是れ也」と、キリスト教が信用を失墜させたことを主張している。³⁸⁾

「万国宗教大会批評」で示された万国宗教会議への認識は、他の日本人仏教者にも共有されたものであり、ケテラーが次のように総括している。①日本の僧侶たちは自分たちなりの大会イメージを作り上げることに意識が向かっていたために、数多くの演説でキリスト教普遍主義による非キリスト教徒への対決姿勢が示されていたことに注意が向かなかった、②僧侶たちは日本国内の仏教教団再建という自らの目的に適う見方で会議の結果を捉えており、誰一人として諸宗教間の論争で決定的な勝利を収めたことを疑う者はおらず、帰国後は自分たちの演説が驚くばかりの成功を修めたことを各地で報告した、である。³⁹⁾

まさに芦津は、講演内容が聴衆に理解されたか否かを客観的に検証することなく、万国宗教会議における「決定的な勝利」を高らかに宣言したのであり、その成果とされるものを日本国内において自らの見解を補強する手段として利用した。それは、一二月に大原嘉吉の翻訳として刊行された『万国宗教大会演説集』における日本語の講演録「大乘仏教ノ要領」である。⁴⁰この講演録は、英文記録の内容を大幅に脚色しており、『真正哲学殺活自在論』と同様に天台と禪の教理と修行法がいかに優れているかを以下のように力説するものになっていた。

まず、中国から日本への仏教伝来の経緯において、法華経の解釈を示した智顗とそれを引き継いだ最澄の功績を顕彰し、「釈迦牟尼ノ大法ヲ統撰スル世界ノ大首府ハ、日本仏法ノ根本タル比叡山ヲ以テシテ（中略）以テ諸宗ノ標準ト為サザルヲ得ズ」と、延暦寺を釈迦の教えを伝える世界の中心、諸宗の標準とまで高く評価した。拙稿で論じたように、芦津が編集長を務めた『四明余霞』に掲載された論説「東洋釈教の大政府」で天台宗を日本仏教の「中央大政府」と論じたことが読者からの批判を招いたのだが、その内容を更に強化する見解を示したのである。

続いて、釈迦を「経」、天台を「緯」として一切聖教の文章は織成されて仏知見が示されるとしながらも、「直下ニ仏法ノ必要トスル概旨」として「物ニ触レテ感覚ヲ生ジ、手ニ在テ執捉シ、脚ニ在テハ運奔スル者ハ、是レ即チ心ノ作用ニシテ、神ノ所作ニアラズ」と心の働きがあるからこそ眼・耳・鼻・舌・身・意の六根を通じて目の事物が認識されるのであり、事物は心の影像に他ならず、自身を何ら束縛するものではないと知ることが仏知見・見性成仏であるという『臨済録』を引用した解説を行っている。⁴²

最後に、現世において応身の釈迦が説いた法華経こそが大乘仏教の神髄であるが、仏教において経論は証悟を表す証文に他ならず、自らの心が開悟して釈迦の境界に至れば法華経を含めた一切の経は「不浄ヲ拭フノ古紙」でしかないと述べており、再度『臨済録』を引用しながら、禪の実践に取り組む者が「大乘ノ行者」であるとする天台と禪を融合した議論を展開したのである。

「大乘仏教ノ要領」は、大原の翻訳という表記は名目のみであり、実際には芦津が執筆したものと推測される。その末尾には「（大喝采）」とあり、芦津は従来からの主張が万国宗教会議で全面的に賛同されたと宣伝したのである。

明治二七年に入ると、芦津は万国宗教会議の成果を報告するために地方を巡回した。すなわち、三月・四月は愛知県・静岡県・長野県・群馬県、五月・六月は島根県・鳥取県、八月・九月には群馬県・福島県・宮城県で演説会を催している。⁴³四月七日に長野県埴科郡屋代町の智性院を訪れた際には、「万国宗教大会報告演説」と書かれた幟を先導とする信徒に迎えられており、智性院には千有余名の傍聴人が集まったために、急遽三百人余を収容できる飯屋が建築されたとされている。一四日に赴いた群馬県西群馬郡高崎町では、各宗寺院二五カ寺とその信徒の出迎えを受けた。アメリカ帰りの芦津の知見は、地方において相当な注目を集めたことがうかがえる。各地で芦津が行った演説は、万国宗教会議での「決定的な勝利」によって権威づけられ、宗派の枠組みを超えた形で従来以上の説得力をもって人々に受けとめられたのである。

2 天台宗からの僧籍離脱

仏成道日である明治二七年（一八九四）二月八日に、芦津が發起

人となり四恩会と称する団体が創設された。芦津の執筆による「四恩会創立主意書」によれば、①既に締結された日英通商航海条約に基づき明治三二年に外国人の内地雑居が開始されることは、国権の消長・国力の伸張・国民の強弱に関わる至大至重の事業であること、②区々である各宗教義においても父母・衆生・国王・三宝に報謝する四恩は中心になっていること、③日本人たる資格を全うするには四恩に報いることが必要なのであり、それを理解せずに内地雑居を迎えれば外国人に精神界を侵されることが論じられている。また、合わせて全一六条の仮規則も作られており、会員資格に宗派の異同を論じないこと（第四条）、創立事務所を芦津の自坊である坂本の慧日院に置くこと（第六条）などが定められた。⁽⁴⁴⁾

この年の七月二五日には日清戦争が開戦されており、戦争支援の方針を打ち出した天台宗は、一月一〇日に従軍布教師・慰問使の辞令を大照円朗・琳賀覚定に出している。⁽⁴⁵⁾このような国際情勢の変化が、芦津に四恩会の発足理由である対外問題を意識させたと考えられるが、万国宗教会議報告演説会の成功も会の創設に大きな意味合いがあった。芦津は、一月一九日から岐阜県西濃地域に訪れて「皇軍勝利兵士健全の御祈禱会並に万国宗教大会の実況を演説」しているが、翌年一月には四恩会の勧誘に呼応した安八郡神部町善学院住職坂本実秀らの尽力で一〇〇余名の会員が獲得されたのである。⁽⁴⁶⁾運動の基軸に据えられた四恩は、かつて芦津が参加した明道協会の基本理念であり、万国宗教会議報告演説会で宗派を超えた多くの人々を動員できたことを受けて、芦津はこれまでの活動で抱いていた自らの信念に基づく布教活動を大きく展開させようとしたのである。四恩会の会員は明治二九年六月には数千名まで増加した。⁽⁴⁸⁾

芦津は、四恩会の活動と並行して、教団内においても重要な職務に

当たっていた。すなわち、明治二九年九月一六日に本宗略史編纂委員に就任し、その四ヵ月後の二月二四日に『皇朝天台史略』全三冊を刊行したのである。⁽⁴⁹⁾『皇朝天台史略』は、総論と釈迦出生から延暦寺開創までの略史を示したうえで、延暦一〇年（七九一）四月の日吉祭創始から明治二九年九月二四日の村田寂順天台座主就任までの歴史事項を編年で羅列していく構成になっていた。『皇朝天台史略』の編集方針や執筆姿勢に関して、芦津は『四明余霞』に「史略出現の要」・「得隴望蜀」と題する論説を寄稿し、次のように論じている。編集方針については、天台宗の歴史を上代（延暦寺創建からの三百年）・中古（源平二氏執政からの五百年）・近古（徳川氏執政からの三百年）・現今（明治元年以来今日まで）の四世期に分け、それぞれを全盛・退歩・保続・衰運に位置づけたとしている。これは『日本宗教未来記』の構成と同じであり、自らの仏教史観を改めて天台宗史に当てはめたのである。執筆姿勢については、「其精査を逐るの暇を得ずと雖、其史籍に備ふるの書冊は無慮六百余巻の真俗史冊を左右に備へし」と述べており、短期間で精力的な執筆活動を行ったことがうかがえる。さらに、末寺の歴史をまとめた『皇朝天台史略』続篇を編纂する意向を示し、執筆材料の提供を広く宗内に呼びかけた。⁽⁵¹⁾

このような旺盛な活動を続ける一方で、明治三〇年に入ると『四明余霞』の誌面に芦津が編集から外れたことを指摘する記事が掲載された。すなわち、二月号の「時事評論」欄に、芦津が編集長を辞めたことが原因で『四明余霞』が陳腐で活気のないものになったと批評されたことが記されたのである。それに対して芦津は、「吾曹は本誌の首唱者なれば、都合上表面の名を辞するあるも、其実は依然として責任を負ひ」と、既に編集長を辞任したが編集の責任は負っていると反論を加えた。⁽⁵²⁾しかし、芦津は八月号の「法話」欄に「告別」と題する文

章を寄せ、内外の情勢や教団の前途を憂慮して天台座主に行った献言の内容が実行されなかったことを理由として、自らの志を「尽し得べきの地に於て之を尽さんと欲す」と辞意を表明したのである。同号には編集担当者であった菊岡義衷も退任の意向を示す「文壇を辞す」を「評論」欄に載せており、明治二七年の段階で芦津は編集長を辞任して四恩会の活動に軸足を移したために、それ以降は自分一人が編集の責任を抱え込んだことを告白している⁽⁵³⁾。

芦津の辞意は、宗務庁の役職を退くのみではなく、天台宗の僧籍も離脱するというものであった。八月一日に天台座主に対して「自今入廓垂手、自在に応化仕度候間、現職僧官返上に及び候也」とする文面の辞表を提出したのである。この辞表を掲載した『明教新誌』は、芦津による僧官返上の理由を、「予て神仏一致の議を持せられ、其事実を世上に顕らはし以て皇朝天台史略を今日に活用せんとの意見」を実行するためと報じた⁽⁵⁴⁾。

芦津が僧籍離脱する直接の理由になったのは『皇朝天台史略』活用の問題であったのかもしれないが、その根底には思うに任せない布教活動や紛争が続いた教団内の状況があったと推測される。混乱を極めていた天台宗において自らの責任を果たすことよりも、万国宗教会議での「決定的な勝利」によって作り上げた四恩会を背景とした宗派の枠組みを超えた布教活動の方が芦津の目には魅力的に映ったことが僧籍離脱に結びついたのではないだろうか。

おわりに

本稿の内容を整理したい。全国的な布教活動や著書の出版によって仏教界を代表する学僧として知られることになった芦津は、仏教各宗

協会の定期大会で各宗派の教理と歴史を集成する『仏教各宗綱要』の編者に選出された。そのような芦津の名声はアメリカ宗教界にも届き、コロンビア万博に併設された万国宗教会議に講演者として招待されるという栄誉を得たのである。

芦津は、講演において仏教の基本的な概念を提示するとともに、それらを素材として大乘仏教が「小乗仏教」よりも優越していること証明しようとした。その中で、天台智顗が提唱した教相判釈である五時八教を大乘仏教の価値を示す有力な教理として用いており、天台教学こそが最高の宗旨であるとする自らの立場を明示したのである。また、『興禪護国論』を引用しつつ禪思想の特質についても紹介した。芦津の講演は、それまでの修学・修行や社会的活動によって獲得された自らの思想を反映させたものであった。

芦津を始めとする日本人仏教者の講演は、その目的を聴衆に伝えることが十分に配慮されていない内容ではあったが、万国宗教会議に参加した高揚感も手伝ったのであろうか、芦津は会議における自らの「決定的な勝利」を確信し、帰国後に講演内容を大幅に脚色した「大乘仏教ノ要領」を発表して、従来から唱えてきた天台教学と禪思想の融合論を強く主張した。万国宗教会議の成果を報告する各地での演説会には傍聴人が詰めかけており、アメリカ帰りの知見と「決定的な勝利」の報告は、多くの人々に説得力をもつて受けとめられた。活動の軸足を四恩会へと移したことに象徴されるように、万国宗教会議の経験によって視野が大きく広がった芦津にとっては、停滞する天台宗の宗務に携わることとはもはや桎梏でしかなかったと考えられる。芦津は、『皇朝天台史略』の活用が受け入れられなかったことを理由として、宗務庁の役職を辞任するとともに、天台宗の僧籍を離脱したのである。

内務省から天台座主選挙結果の取消命令を受けるような明治中期までの未成熟な天台宗の教団運営は、布教活動の充実によって教勢の拡大を図る芦津の危機感を受け止められる水準に達していなかったと思われる。しかし、拙稿で指摘したように、明治後期に至り浅草寺住職奥田貫昭を中心に発足した布教団体顕揚会に所属する若手僧侶が教団に対する発言力を確保し、改革を推進しうる状況が生まれていた。そのような明治後期以降の天台宗僧侶による布教活動と教団運営の関係については、今後の検討課題としたい。

註

- (1) 森孝一「シカゴ万国宗教会議：1893年」、『同志社アメリカ研究』二六、一九九〇年、大井浩二「ホワイト・シティの幻影 シカゴ万国博覧会とアメリカ的想像力」(研究社出版、一九九三年)。
- (2) 鈴木範久『明治宗教思潮の研究』(宗教教学事始) (東京大学出版会、一九七九年)。
- (3) 武藤亮飛「万国宗教会議再考―いかにして「対話」は始まるのか―」(『宗教教学論集』三三、二〇一四年)。
- (4) ジェームス・ケテラー・岡田正彦訳『邪教／殉教の明治―廃仏毀釈と近代仏教』(ペリカン社、二〇〇六年)。なお、ケテラーの研究以前には、鈴木が註(2)前掲著書で日本人参加者の行動、森が註(1)前掲論文でアメリカ宗教史を含めた研究史整理や会議の運営方針、平井の講演内容など、樋口章信が「アメリカに渡った清沢満之の精神―野口善四郎参加の1893Chicago World Parliament of Religionsをめぐって―」(『大谷学報』七五―二、一九九五年)で野口の講演内容などを分析した。
- (5) 那須理香「1893年シカゴ万国宗教会議における日本仏教代表釈宗演の演説―「近代仏教」伝播の観点から―」(『日本語・日本学研究』五、二〇一五年)、高瀬航平「条約改正と宗教―1893年シカゴ万国宗教会議における平井金三の演説―」(『東京大学宗教学年報』三七、二〇一〇年)。那須・高瀬の研究以外では、高満也が「シカゴ万国宗教会議と明治初期の日本仏教界―島地黙雷と八淵蟠龍の動向をととして―」(『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』一三、二〇一一年で島地と八淵による万国宗教会議への対応、ジュ

- デイス・ストノグラスが「シカゴ宗教会議のストラテジー―仏教と条約改正―」(末本文美士・林淳・吉永進一・大谷栄一編『ブッダの変貌―交錯する近代仏教―法蔵館、二〇一四年)で平井と日本キリスト教の参加者の講演内容、武藤が註(3)前掲論文で主催者側の思想を検討している。
- (6) 註(4)前掲ケテラー著書。
 - (7) 拙稿①「芦津実全と『真正哲学救活自在論』」(『禅学研究』九九、二〇二一年)、同②「明治前期における天台宗宗務組織の形成」(『天台学報』六四、二〇二二年)、同③「芦津実全と『日本宗教未来記』」(『禅学研究』一〇一、二〇二三年)、同④「明治中期における天台宗宗務組織の展開」(『天台学報』六六、二〇二四年)。
 - (8) 仏教各宗協会については、中西直樹『新仏教とは何であったか 近代仏教改革のゆくえ』(法蔵館、二〇一八年)参照。『仏教各宗綱要』編纂については、ケテラーが註(4)前掲著書で検討している。
 - (9) 『明教新誌』明治三年六月二日付・同二六日付。
 - (10) 『明教新誌』明治三年六月三〇日付。
 - (11) 『四明余霞』三三「明治三三・八／三六」。なお、本稿では『四明余霞』の号数・発行年・発行月・頁数を〇〇『明治△△・□□／◇◇』と表記する。
 - (12) 『四明余霞』の発行所は天台宗務庁文書課である。
 - (13) 『天台円宗綱要』は『四明余霞』三三「明治三三・九／廣告一」に広告が掲載されているが、管見の限りでは現物を見出せてはいない。
 - (14) 『四明余霞』三六「明治三三・一二／三四・三七・三八」。
 - (15) 『四明余霞』四一「明治二四・五／三九」・四三「明治二四・七／四二」。
 - (16) 註(7)前掲拙稿④。
 - (17) 『四明余霞』二六「明治三三・二／四五」。
 - (18) 『四明余霞』五二「明治二五・四／四四・四五」。
 - (19) 『四明余霞』五二「明治二五・四／四六」。
 - (20) 『四明余霞』五五「明治二五・七／三三」・五六「明治二五・八／一四・一九・三七・三九」・五七「明治二五・九／一四・一九」・五八「明治二五・一〇／二一・一四」・五九「明治二五・一一／二〇・二四」・六〇「明治二五・一二／二一・二四」・六一「明治二六・一／一七・一九」。
 - (21) 『四明余霞』五六「明治二五・八／三七・三九」。
 - (22) 『四明余霞』六〇「明治二五・一二／三五」・六二「明治二六・二／九・一」。
 - (23) 註(1)前掲森論文、註(2)前掲鈴木著書。

- (24) 『明教新誌』 明治二六年三月二六日付、芦津実全「万国宗教会議参列陳情書」(『国教』二二、一八九三年)。
- (25) 註(2)前掲鈴木著書。
- (26) 芦津の渡米に対する義捐金募集の状況は、『四明余霞』六四《明治二六・四／廣告五》・六五《明治二六・五／廣告六》・六六《明治二六・六／廣告三／五》・六七《明治二六・七／廣告二／五》・六八《明治二六・八／廣告四・五》・六九《明治二六・九／廣告三》・七〇《明治二六・一〇／廣告四・六》・七一《明治二六・一一／廣告五・六》・七三《明治二七・一／廣告三》に掲載された第一回から第九回までの義捐者芳名報告から知ることができる。
- (27) 『明教新誌』 明治二六年八月四日付・同九月一四日付。
- (28) 『四明余霞』六八《明治二六・八／四一》。
- (29) 『四明余霞』六九《明治二六・九／三八・三九》。
- (30) 註(2)前掲鈴木著書。
- (31) Edited by J.W. Hanson, *The World's Congress of Religions: the addresses and papers delivered before the Parliament, and an abstract of the Congress, held in Chicago, August 1893 to October 1893, under the auspices of the World's Columbian Exposition. 1.2* (Edition Synapse, 2006)
- (32) 佐藤俊哉「聖と俗の境界線上におつて―無住処涅槃―」(『現代密教』一五、二〇〇二年)。
- (33) 林淳「宗教的学知の形成―仏教学を例に―」(『日本思想史学』四三、二〇一一年)。
- (34) 奥山直司「明治印度留学生―その南アジア体験をめぐって―」(『印度学仏教学研究』六四―一、二〇一六年)。
- (35) 市川白弦・入矢義高・柳田聖山校注『日本思想大系16 中世禅家の思想』(岩波書店、一九七二年)。
- (36) 註(4)前掲ケテラー著書。なお、那須も註(5)前掲論文で、土宜の講演内容を全く理解できなかったと聴衆の一人が述べたことを指摘している。
- (37) 『四明余霞』七一《明治二六・一一／四三・廣告五》。
- (38) 『四明余霞』七三《明治二七・一／二／七》・七四《明治二七・二／三／八》。
- (39) 註(4)前掲ケテラー著書。
- (40) 大原嘉吉訳『万国宗教大会演説集』(金山書店、一八九四年)。なお、『四明余霞』七二《明治二六・一二／二〇／二三》にも日本語による芦津の講演要旨が掲載されており、英文記録に忠実な内容になっている。
- (41) 註(7)前掲拙稿③。
- (42) 『臨濟録』の内容については、斎藤智寛・衣川賢次訳注『新国訳大蔵經中国撰述部①―7 禅宗部 六祖壇經・臨濟録』(大蔵出版、二〇一九年)参照。
- (43) 『四明余霞』七六《明治二七・四／三九》・七七《明治二七・五／四〇》・七八《明治二七・六／三九／四一》・七九《明治二七・七／四二》・八二《明治二七・一〇／四一・四二》・八三《明治二七・一一／四七》・八四《明治二七・一二／四一／四三》・八五《明治二八・一／四〇》。
- (44) 『四明余霞』八四《明治二七・一二／三八／四〇》。
- (45) 『四明余霞』八五《明治二八・一／四五・四六》。
- (46) 『四明余霞』八三《明治二七・一一／四五》・八五《明治二八・一／三八》。
- (47) 明道協会における芦津の活動については、註(7)前掲拙稿③参照。
- (48) 『四明余霞』一〇二《明治二九・六／四〇》。
- (49) 『四明余霞』一〇六《明治二九・一〇／四二》。なお、八月二十八日には学務兼文書課長にも就任している(『四明余霞』一〇五《明治二九・九／三七》)。
- (50) 延暦寺文書課編『皇朝天台史略』上・中・下(貝葉書院、一八九六年)。
- (51) 『四明余霞』一〇七《明治二九・一一／一／四》・一一〇《明治三〇・二／一／四》・一一一《明治三〇・三／一／五》。
- (52) 『四明余霞』一一〇《明治三〇・二／一六／一九》。
- (53) 『四明余霞』一一六《明治三〇・八／一九／二〇・二七／二八》。
- (54) 『明教新誌』 明治三〇年八月二〇日付。
- (55) 註(7)前掲拙稿④。
- (56) 拙稿「明治後期天台宗における関東派・関西派の対立」(『立命館文学』六九五、二〇二五年)。

(本学大学院文学研究科授業担当講師)